

指導員養成講習会 理論1

スキーの歴史

担当 望月光弘

こんにちは。神奈川県スキー連盟の望月です。よろしくお願いいたします。

この時間は、「スキーの歴史」と言うことで話を進めさせていただきます。テキストでは「スキー教程指導理論編」の7ページから16ページと200ページ以降の年表が関連する部分です。それと、お手元に「スキー検定 受験者のために」をお持ちの方は12ページをご覧ください。そこに指導員検定のカリキュラムが記載されておりますが、一番上の項目がこれからお話しさせていただく部分に当たりません。

準指導員を受験される方のカリキュラムは前のページに記載されていますが、「スキーの歴史」の項目はございません。と言うことで、ちょっと安心された方も多いのではないかと思います。実は準指導員検定の出題は各県連にまかされており、神奈川県スキー連盟では昨年も「スキーの歴史」に関する出題がされています。(がっかりですか?) でも、重箱のすみを突つつくようなことはありませんし、見方を変えれば、この少ないページ数の中から必ず出題されるわけですから要領よく堅実に取り組んでみてください。

さて、前置きが長くなりましたが本題に入りたいと思います。

1. スキーの始まり

スキーは元来生活の道具として始まりました。きっと移動や物の運搬などに使っていたのでしょうね。それ以外にも子供たちなどはきっと、遊びの道具としても使っていたのではないかと思います。それが10世紀ごろになると、スキーは戦争の道具として発展し始めることとなります。残念なことです。技術などの発展に戦争がからんでいるということはほかの事でも聞きますね。飛行機などはそのいい例だと思います。後ほどお話ししますが、日本のスキーが発展するのも軍隊が絡んでいます。

2. 近代スキーの興隆

でも、きっとそれだけでは現在(のちょっと前ですけど。)ほどスキーが広がることはなかったのではないのでしょうか。軍隊で発展してきたスキーは徐々にその腕前を競うようになり、スポーツとして発展することとなります。ノルウェーの王室が競技の勝者にご褒美を与えるようになると、スキーは一般庶民にも広がりを見せ始めました。1877(明治10年)にはノルウェーにスキークラブが設立され、その2年後には、ジャンプ大会も実施されています。このころ初めて技術体系として「テレマーク技術」が生まれてきました。

ノルウェーのノルディックスキーが徐々にヨーロッパにも広がると、地形の違いなどから別の技術、ツダルスキーの「リリエンフェルト・スキー滑降術」が登場してきました。ノルウェーの「テレマーク技術」は二本杖の長い板。ツダルスキーの「リリエンフェルト・スキー滑降術」は一本杖の短い板。と対照的で技術論争になったようですが、頭が良いと言うか要領が良いと言うか、この二つを足して2で割ったような技術をビルグリーという人が考え出し近代アルペンスキー技術の基礎となったようです。さらにこの技術を発展定着させたのが、野沢温泉のコースにもあるハンネス・シュナイダーです。シュナイダーは、1920(大正9年)映画「スキーの驚異」に主演するとともに、同名の技術書を出版し「アールベルグ・スキー術」を世界に広めました。きっと儲かったでしょうね。

一方、日本のスキーはと言うと、1902（明治35年）八甲田山遭難事件があり、その反省からやはり軍隊を中心に、雪上の交通手段としてスキーを導入しました。さらに1911（明治44年）新潟の高田に、先ほど名前が出たツダルスキーの弟子でもあるレルヒ少佐が着任しました。この方、とってもいい人だったようで、軍のスキー指導のみならず、一般庶民にもスキーを教えてくれたようです。

また、その約10年後の1922（大正11年 関東大震災の前年）これも先ほど名前が出たシュナイダーの映画「スキーの驚異」が日本にも輸入され大きな反響を呼びました。

10ページ「リリエンフェルト・スキー滑降術」写真 内足を使ったターン

11ページ写真 シュプールが美しい 雲海？

しかし、ちょうどこのころ世界では第1回冬季オリンピックがあり、高速技術が追求される中でシュナイダーの減速要素の大きいシュテム技法から減速要素の少ないローテーションによるパラレル（平行）技法へと技術の変化が見られ始めたころでした。

3. 現代のスキー

その後アルペンスキーの技術はこのパラレル技法がさらに、フランスを中心とした「ローテーション技術」と、ドイツ・オーストリアを中心とした「外傾技術」とに別れしばらくの間、論争が続くことになります。ただこのころの時代背景を考えると純粋な技術論争ではなく、第二次世界大戦という時代の流れに影響されているところが大きいのではないかと僕は思います。

日本はこのほぼ同時に入ってきた技術のどちらの立場をとったかと言えば、「外傾技術」であり、この技術を活用した猪谷千春は第7回冬季オリンピックでスラローム2位という快挙を成し遂げました。

さらにクルッケンハウザー教授はオーストリアの伝統的なシュテム技術を改善した「バインシュピール技術」を発表し、いっそう論争は激しいものになりました。この技法における滑るブルークは、初心者の上達を早めるなど、指導上での実効性もあり、日本はいっそうオーストリア・スキーに傾倒していくことになります。

しかし、高速を追及する競技の世界で次第に選手の滑りに共通する技術的傾向が見られるようになって来たあたりから論争は終焉に向かい始めます。1968（昭和43年）第8回インタースキー・アスペン大会において両国の歩み寄りが見られました。「早いものは美しい」

この後もいくつかの技術が発表されてきましたが、やはり技術の内容は類似したものであり、情報社会と国際化の進展によって、技術は世界共通になりつつ現在につながっています。

流れを追って短時間でお話をしましたので、分かりにくいところもあったかと思いますがご容赦ください。キーになる人物や技術、年代については特にウェートを置かれて整理すると良いかと思います。また、冬季オリンピックとインタースキーについても年表をまとめておくとも良いと思います。

今日から来年3月までの長丁場になります。くれぐれも体調に気をつけてがんばってください。ありがとうございました。